

関西大学勤務38年の思い出

平 田 重 和

1970年（昭和45年）に関西大学（文学部）に奉職して以来38年の歳月が経った。丁度吹田市の丘陵で万国博覧会が開催されている年だった。個人的には、家も京都の伏見から高槻の玉川橋団地に転居し、クルマの免許を取得した年でもあった。専任講師という資格で採用されたのだが、69年の大学紛争の余燼が濃厚にあり、勤めそのものが大変だった。大学のキャンパス及び教室は前年に較べると、かなり正常化されているということだったが、教室へ赴くのに大げさに言えば「戦場」へ出かけるような雰囲気があった。教授会も状況に応じて会場を変え、当時天六にあった2部の校舎で行われたこともあった。教授職にあった先生が、学生集団に取り囲まれ、いわゆる「つるし上げ」に会うという場面も多々あったようだ。

新任の若輩教師には初級文法や初級講読といった科目の授業が多かったが、幸い私は一度だけ「文法」の時間にヘルメットを被り、タオルで顔を覆い、鉄パイプをもった10人ほどの学生集団に侵入され、授業を邪魔されるという経験で済んだ。彼らは「何とか集会に参加しろ」というようなことを受講生に向けてアピールしていた。私も若かったので、彼らを無視し、文法の授業を継続した。すると学生集団の指導者のような若者が、「授業を中止し、我々の演説を聴け」と迫ってきた。私は「では受講生にどちらがよいか、聞いてみよう」と語りかけた。クラスのほとんどの学生が「文法の講義を聞きたい」という意志表示をしてくれたので、無事授業を継続し、ヘルメット集団は、やむなく引き上げていった。今思いだせばほろ苦くも、懐かしい場面であった。このクラスが、私が関西大学で教えた最初の学年である。この中には、現在奈良大学の教授になっているブルースト研究家の田中 良君と詩人でもありボード

レール研究家で、本学の非常勤講師を勤めている丸瀬康裕君がいた。

その後は上級学年も担当するようになったが、クラスの上位に位置するような学生はよく勉強し、どこの大学とフランス語力を競っても負けないほどの優秀な学生が毎年いたという印象を持っている。こうした卒業生の中に天理大学（2人）や関西学院大学、山口大学で教鞭をとっている教え子がいるし、本学に残って要職についている人もある。さらに非常勤講師として教壇に立っているOBは20人ほどいる。

昭和58年（1983年）に卒業論文の指導をするための「卒業論文演習」という科目が設置され、この科目はゼミのような形式で、毎年6・7人から10人ほどの学生が私のゼミにきた。ほとんどがアルベール・カミュについての卒業論文を書く学生だった。『異邦人』をテーマにする学生が多かったが、この小説はとっつき易いが、いざ論文を書き出すとなかなか難しいところがあり、途中で立ち往生するような場面も多々あった。

勤めて3年目の1973年には、フランス政府招聘のスタージュ（研修）で、フランスへ留学することができたことは、ありがたいことだった。スタージュ期間は3ヶ月だったが、大学（文学部フランス語フランス文学科）から、特別に6ヶ月の延長を認めてもらい合計9ヶ月のフランス滞在をした。フランス留学などまだ珍しい時代に、勤めて2年半にしかならない若造に9ヶ月の留学許可を与えてくれた大学に感謝する次第である。その後大学の在外研究員や私費留学を含めて7回ヨーロッパの地をふんでいるが、現地体験をするということは、やはり授業に反映していたと思う。私費留学の時は、カミュの小説『ペスト』の舞台になったアルジェリア第2の都市オランという街（3日間滞在）と、カミュの生地でもあり小説『異邦人』の舞台にもなっている首都アルジェ（1週間滞在）を尋ねた思い出は強烈な思い出として残っている。

年齢的に40代では、成人病を患い、2年に1度の割りあいでも入院を繰り返し、同僚の先生方や学生諸君には迷惑をかけたが、一方では教員のスキー同好会やテニス同好会に入り、大いに楽しい時を過ごした。私はいわゆる道産子ではないが、幼少の多感な頃を北海道で過ごしたの

で、北海道出身の先生方と道人会（エルム会）なるものを立ち上げ、思い出したように「飲み会」を開き楽しい一時を過ごしたりもした。

その後文学部も様変わりしフランス語フランス文学科（現在は専修）でも、文学・言語学以外の文化も卒業論文の対象としてもよいということになり、私のところへは、フランス絵画をテーマにする学生がきて、指導しながら私も勉強し、楽しいゼミだった。年齢も50代になって大学院も担当するようになったが、少人数クラスだったので、いまでも一人一人の顔が浮かぶ。

教授会メンバーのなかでは学科（今は専修）を超えて、親しくしていただいた先生もたくさんおられ、退職されてからも（なかにはすでに故人になられたかたもある）、何かの折に声をかけていただいたりしている。フランス語フランス文学科において、在職中に亡くなられた同僚の先生方もおられ、時折そうした先生のことを懐かしく思います。

松尾芭蕉の『奥の細道』の冒頭の句に「月日は百台の過客^{かかく}にして、行きかふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老いをむかふる物（者）は、日々旅にして旅を栖^{すみか}とす」という名文句があるが、古希を迎え私も退職することとなった。関西大学勤務の38年間は趣味の延長のようでもあり、厳粛な仕事をしたという感じもあり、複雑な心境だが退職とう人生の一里塚を前向きに受け止め、今後の励みとしたい。支えて下さった方々に感謝の意を表し、この小文を終えることにします。